

排膿術を受けたが、腹直筋～腸腰筋にまで及ぶ壊死性筋膜炎に至り、5月29日に当院に救急搬送された。同日、健全な組織が露出するまでの切開、壊死筋膜炎の除去、ドレナージを施行した。術後2日目に骨盤腔より出血し、一時 shock となり圧迫止血した。以後開放創の洗浄を連日続けた。経過中、見当識障害がみられ、ヨードホルムガーゼの多用によるヨード中毒と考えられ、これの中止にて軽快した。経口摂取が進むのと同時間に見当識障害も改善した。約2ヶ月間の治療後、創部は清浄、全身の炎症所見も消退した。Fournier 症候群に対し、積極的な切開、ドレナージにて良好な結果を得たため報告する。

15 手術前症例に対する上下部スクリーニング内視鏡の成績

中村 茂樹・田邊 匡

県立加茂病院外科

【目的】 消化器手術前症例に対するスクリーニング内視鏡検査の意義を明らかにする。

【対象と方法】 過去4年間にスクリーニング内視鏡を行った消化器手術症例をカルテ調査。

【結果】 上部スクリーニング内視鏡の施行率は119/142例84%、有所見率は10例8.4%、癌発見率は6例5.0%だった（食道癌1、胃癌5、その他4）。下部スクリーニング内視鏡の施行率は113/144例78.5%。有所見率は41例36.3%、大腸癌発見率は9例8.0%だった（大腸癌9、薬剤性大腸炎2、ポリープ30）。発見された消化管癌15例はすべて早期癌で、内視鏡施行時にポリペクトミーまたはEMRされたもの7例、手術時に同時切除されたもの6例、治療せず（原疾患に肝転移）が2例だった。スクリーニング内視鏡で発見された大腸癌症例の便潜血反応は、化学法20%、免疫法60%だった。

【考察】 消化器手術前に行うスクリーニング内視鏡の癌発見率は高く、集団検診の2次精検に劣らない。また内視鏡検査や手術時に同時に治療ができるという利点もある。癌患者では、重複癌の発生率が高い可能性も考えられる。便潜血反応は

早期大腸癌の発見に必ずしも有用でない。

【まとめ】 消化器手術症例の術前にスクリーニング内視鏡を行うことは、重複癌を早期発見し、同時に治療できる点で、大きな意義がある。

16 乳房温存手術における整容手術

三浦 宏二・川合 千尋*

がん検診クリニック三浦外科

消化器科, 外科川合クリニック*

近年、乳癌手術は縮小傾向にあり温存手術が主流となりつつある。

しかし、腫瘍の局在、大きさ、切除範囲によっては乳房の変型や乳頭の変位が生じ、温存手術の本来の目的である美容が十分に達成されない場合もある。

当院では外側乳癌症例に対して温存手術を行う場合には、切除欠損部に広背筋の一部を充填して乳房形態の保持に努めているが、簡便で安全な方法と考えられるので報告する。過去7年間の全乳癌手術症例数78例中、乳腺全切除十期的乳房再建術36例、乳房温存術19例である。温存手術のうち、腫瘍の局在がCもしくはDでQuadrantectomyを行った症例12例に対して、腋窩郭清の後、広背筋の一部を有茎筋弁として欠損部に充填した。

整容術を付加しない温存手術群の平均手術時間は59分、付加した群では78分であったが重篤な合併症は皆無であった。

整容術を付加した症例では全ての症例で乳房の変形や乳頭の変位は全くなく、患者の満足度も高かった。8例に術後照射を行ったが充填した筋弁の萎縮等は全く認めなかった。

この手術は従来の乳房温存手術と同じ傷（腋窩から乳房下溝腺に到る弧状切開）で、体位交換も不要で簡便であることから、外側乳癌に対する温存手術で、乳房の変型が予想される場合には推奨される付加手術と考えられる。